Lady & Joker

pink

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌａｄｙ　＆ａｍｐ；　Ｊｏｋｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ１１１０Ｚ

【作者名】
ｐｉｎｋ

【あらすじ】
魔法に魅了された男と女の話

魔法とは異能力の事です。大変危険な力なのでこの世から抹消しましょう。
魔法使いとは人間の敵です。世界に害を成すモノは排除しましょう。
人間とは世界のルールです。私達の考える善悪に従い、より良い住処に変えていきましょう。

物心つく前から、刷り込まれてきた常識。
私が生まれるずっと昔からある、世界共通の決まり事。
お父様もお兄様も沢山の友人たちも、誰一人疑わない。
何故享受しているの。私は甘受する事に精一杯なのに。
何故疑問を抱かないの。周囲の流れに合わせているだけでしょう。
何故知ろうとしないの。敬遠しているだけではつまらないじゃない。
こんなくだらない世界じゃ、生きていく意味が見つからないわ。

そして世界を飛び出したのは、もうずいぶんと前の話。

＋　＋　＋

外から聞こえてくる小鳥たちの囀（さえず）りが心地良い。

不規則に響き渡るそれに耳を傾けていると、羽毛布団の暖かさと相俟(あいま)って覚醒しきれない脳が惰眠を欲しがる。
「　　」
何か言われた気がした。どうでもいいや。
「　　」
まだ何か言っている。軽く揺さぶられ、頬をぺちぺちと叩いてくる。毛布の中に潜ることで回避。
すると毛布の上から頭を撫でられた。その手は背中を通り、腰のラインから脚に滑らされた。
少しだけ、意識が覚醒。まさかこいつ、朝からヤる気じゃないだろうな。
乱雑に足を振り上げると、その勢いで太ももから先が外気に晒された。失敗した、寒い。
縮まって毛布の中に戻ろうとしても、毛布の位置と向きがずれていてなかなか成功しない。
いらつきながら苦戦していると、大きいため息が聞こえた。
「……しゃーねーなぁ。カーテン開けるぞ」
え、それは嫌だな。私はまだ眠いんだって。誰のせいで寝れていないと思っているの。
しかし残念ながら私の欲求は通らず、無情にもカーテンを全開にされた。

田舎街にある、そこそこ高めの宿屋。
所謂隠れスポットと言える宿の一室で、二人きりの優雅な朝食タイムを過ごしていた。
外装はそれなりだが、内装はアンティークで落ち着く空間に仕上げられ、部屋の間取りも広くて綺麗。今はベッドヘッドの鈴蘭の彫刻がお気に入り。

いつも早起きな相方が部屋に取り寄せた朝食は、クロックマダムにサニーレタスが添えられたポテトサラダ、食後用の珈琲と柑橘類のゼリーヨーグルトムースだ。
半熟の目玉焼きが絶妙。バターのしみ込んだカリカリのパンが香ばしい。
一方相方はというと、バターロールのチキンサンド二つをあっという間に食し、今は珈琲を飲みながら新聞を広げている。
もっと味わえばいいのに。
「この間の騒ぎが長引いてるな」
「美術館に忍び込んだ時の？」
「忍び込んだっつーか、正面突破で強盗した時の」
そう言って相方は新聞の見出しをこちらに向けた。
残ったパンの耳とハムを咀嚼しながら、その一面を斜め読みする。
「ん……“レディ・ジョーカーのお手柄”“騎士団異例の会見”。私たちのコンビ名について毎回思うんだけど、どうしてレディが先で、ジョーカーが後なの。言いやすいからかしら」
「注目すべきはそこじゃないと思うけどな。まあ、言いやすいからじゃねーかな」
「弟子より師匠の名前が先って、なんだか微妙」
「いいじゃねぇか。お前の方が俺より目立ってるし」
「あー、そうだよね。顔隠してるから、尚更目立つんだよね」
有ること無いことがない交ぜになった記事に飽きて、ポテトサラダを食べきる。小皿に残されたのは、小さく千切られたサニーレタスのみ。ベジタリアンである私は、味の付いていないサニーレタスでも美味しくいただけるのだ。美味、美味。
「いっそのこと、顔晒しちまったら？面倒だろ、毎回隠すの」
新聞を畳んだ相方のジョーカー、愛称・ジャックは、青い目を細めて椅子を見た。そこには私の紫のスカーフがかけられている。
猫耳付き黒パーカーのフードで目元を隠し、スカーフで鼻から下を覆う。他の部分はその日の気分で恰好を変えているが、パーカー

とスカーフは定番アイテムとなっている。
「洗濯がちょっと大変だけど……まあまあお気に入りだし。兄たちにばれるとねー。そっちの方が面倒」
「そういやお前の家族、ほぼ全員騎士団員だっけか」
「そうそう。今以上に情報規制とかかけられちゃうと行動しづらいし。ていうかその記事さ、騎士団の事ボロクソに書いてあってちょっと面白い」
「魔法ごときに後れをとっている、っていうところか？」
「うん。その記事書いた人も私のお兄様方も、もうちょっと考えてよって思う。魔法の方が有利なのは当然でしょ」
「この時代にゃ、まだ魔法無効化（マジックキャンセラー）はないしな」
「……また未来に行ってきたの？」
「おうよ。ほら、半年くらい前、お前が過去に遊びに行った時」
「遊びじゃなくて“時間修正”しに、ね。また勝手に扉使ったの？いい加減、門番のおにーさんに怒られるよ」
「アイツから逃げきれば問題ない」
珈琲に少し口をつけてから、先にデザートをいただく。これまた絶妙な味だ。レモンとオレンジがかなり酸味を主張しているが、糖度が高いのかグレープフルーツがとても甘い。ヨーグルトにも少し甘みがあって、全体的に丁度いいバランス。
「ジャック、ここのご飯最高。また来よう」
「そうだなぁ、明日になればここら一体にも検閲が敷かれるだろうし。そこに乱入して北へ逃げるっつーのも楽しそうだ」
「それ最高。じゃあもう一泊していこうね」
「昼飯はちゃんと下に降りて食べようぜ」
「了解。昨日宿に来る途中でさ、いいなーって言ってたお店あるじゃん？お昼までの間、あそこで買い物したい」
「レディ、あんまり荷物増やすなよ」
「わかってるって。ジャックの鞄に入る程度にするから」
「俺の鞄かよ」

食後の珈琲を飲み終えて、席を立つ。
私も相方も、本名は捨てた。今はレディとジョーカーというのが名前。
魔法使いのジャックに魅かれて家を出て、仕事や趣味で過去と現在を行ったりきたりの生活をしている間に、私も魔法使いとしてそこそこ成長した。
世界が異端だと卑下する魔法。それは私たちにとって、とても楽しい力だ。
私もジャックも楽しい事が大好き。楽しくて可笑しければ、世の中を満喫できる。
だから明日はとても楽しみだ。
今度はどうやって騎士団を出し抜いてあげようかしら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1110z/

Lady & Joker

2011年12月4日02時49分発行